

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 3 日現在

機関番号：34310

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2013

課題番号：21520293

研究課題名（和文） ジェームズ・ホッグを中心としたスコットランド文学・文化研究

研究課題名（英文） A Study of James Hogg's Literary and Cultural Works in early 19th-century Scotland

研究代表者

金津 和美（KANATSU KAZUMI）

同志社大学・文学部・准教授

研究者番号：90367962

研究成果の概要（和文）：スコットランド国境地方の出身で「エトリックの羊飼い」として知られる、イギリス・ロマン主義期を代表する詩人・作家ジェームズ・ホッグを中心に注目し、19世紀初頭の都市を中心とした著しい近代化の中で、文学作品及び文芸誌を媒体として、スコットランド固有の農村文化が保全し、再構築しようとする試みを調査、検証することにより、スコットランド文学史及び文化史におけるホッグの功績の位置づけと意義を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This research aims to examine the literary and cultural works of James Hogg, a Scottish poet and writer known as “Ettrick Shepherd” during the Romantic period. This study focuses not only on his literary works, but also on his extensive contributions to various periodicals and journals published in the early 19th century. By doing so, this study elucidates the way in which Hogg preserved and reconstructed the local culture of Ettrick, his own village in the Scottish Borders, according to the literary and cultural modernization in Edinburgh.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	300,000	90,000	390,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	300,000	90,000	390,000
年度			
総計	1,600,000	480,000	2,080,000

研究分野：文学

科研費の分科・細目：英米・英語圏文学

キーワード：英語圏文学 スコットランド文学・文化研究

1. 研究開始当初の背景

ジェームズ・ホッグはウォルター・スコットを中心とした文人サークルの一員であり、また、イギリス・ロマン主義を代表する文芸誌『ブラックウッズ・エディンバラ・マガジン』誌などへの寄稿を通して、多くの作品を多くの作品を残した詩人・作家である。しかしながら、ヴィクトリア朝時代になると、内容や

文体が道徳的、宗教的に不適切で節度を欠くという理由で、彼の作品はほとんど再版されることなく、省みられることはなかった。

ホッグの再評価に先鞭をつけたのは、1947年のクレセット・プレス版による代表作『許された罪人の手記と告白』の再版である。作品の現代性を高く評価するフランス人作家アンドレ・ジッドの序文が付けられたこの判

によって、ホッグは怪奇小説作家として注目を集めた。さらに、1980年代以降、スコットランドにおけるポスト・モダニズムを築いたとされるアーヴィン・ウエルシュ、アラスター・グレイ、イアン・ランキンといった作家たちによってホッグの『告白』が評価され、その影響関係が指摘されるようになるとともに、ポスト構造主義やディコンストラクション批評の立場からしばしば論じられるようになる。

モダニズムやポスト・モダニズムの作家たちが『告白』に注目したことでホッグの再評価が高まったが、それは次第に、研究者たちにホッグの膨大な他作品の見直しを促す結果となった。海外におけるホッグ研究は、1981年に設立された「ジェームズ・ホッグ協会(The Society of James Hogg)」を中心として本格化する。特に、エディンバラ出版局からホッグの全著作(小説、詩、雑誌への投稿や手紙も含めて)が編集され、刊行されたことは大きな成果である。1995年から始まったこの事業は、現在も続けられているが、当初は2012年に完結する予定であった。また、2007年には校訂版ホッグ全集の編者の一人、ギリアン・ヒューズ氏によって伝記(*James Hogg: A Life*)が出版された。海外における現在のホッグ研究は、以上のように、定本とされる全集や伝記の出版によって研究環境が整備された段階であり、それらを用いて今後ますます本格的で発展的な研究を行なわれることが期待された。

一方、国内のホッグ研究については、極めて萌芽的な段階にあった。国内における先行研究としてまとまったものは、高橋和久氏の『エトリックの羊飼いや、或いは、羊飼いのレトリック』(2004年)のみである。また翻訳においても同じく高橋氏による『悪の誘惑-義とされた罪人の手記と告白』(1980年)を始めとして、短編が数編翻訳されているに留まっている。高橋氏の功績により、ホッグ研究の重要性は国内でも広く認められることになったが、しかしながら、この分野における研究成果は依然として数少ない。そのため校訂版ホッグ全集の刊行を始めとした国外での研究動向に鑑み、より多角的で広範な視座からホッグの作品や業績を考察することは、今後の国内でのスコットランド文学及び文化研究において急務と思われた。

2. 研究の目的

研究開始当初における国内外でのホッグ研究の動向を踏まえた上で、本研究は、整備されつつある一次資料を用い、ホッグの作品の根底を支える農村文化の諸相を明らかにすることを目的として、主に以下の3点を考察することを目指した。

(1)ホッグが投稿した文芸誌への記事を中心に、スコットランド国境地方の農村文化がいかに表象され、また、それがどのように都市出版文化の中で受容されていったのか。

(2) 上記の著述資料の分析を通して明らかにされるホッグの農村文化観が、いかに実際の農村社会を保全する試みとして反映されたかを、ホッグが携わった文化活動を調査することにより検証する。

(3) また、文学作品及び文化的活動の両面においてホッグによって構築された文化遺産が、どのようにして現代にまで受け継がれ、現代のスコットランド文化及びスコッティッシュ・アイデンティティーの形成においてどのような意義を担っているかを考察する。

3. 研究の方法

(1) 分析の対象とする一次資料は、文芸誌への投稿記事を主とした。その理由の一つとして、ホッグの雑誌投稿記事には農村における習慣や行事についての叙事的な記述が多く、小説などに比べて虚構性が希薄であるため、農村文化そのものを知る文献資料としてより信憑性が高いと考えられるからである。また、文芸誌の場合、対象となる読者像が限定しやすい。したがって、異なる読者層を対象とした文芸誌への投稿記事を比較検討することにより、農村文化が受容される都市文化の多様性が明らかになるばかりでなく、その多様性の差異化を通してホッグが保全しようと努めた文化の真相を解明することが可能となる。分析の対象とした資料は主に以下の通り。

① 1810~1811年にホッグ自身が出版・編集した文芸誌『スパイ』及び初期『ブラックウッズ・マガジン』誌投稿作品など。『ブラックウッズ・マガジン』誌については、1817年~1825年に掲載された記事を新たに編集した校訂版が2006年に出版されている。上記の8年間は、『ブラックウッズ・マガジン』誌の形成期としてのみならず、ホッグにとっても彼の名声が確立された重要な時期である。新編集によるこのコレクションとホッグの投稿記事を相互に分析、検証することにより、この雑誌におけるホッグの関わりやその位置づけが明らかになる。また、ホッグは主要文芸月刊誌の他にも娯楽性の強い文学年鑑などにも多く投稿しており、これらの投稿記事は同じく校訂版ホッグ全集の一巻としてまとめられ、すでに刊行、または刊行予定である。

② 研究当初ジェームズ・ホッグ協会の本部でもあったスターリング大学はホッグ研究

の拠点として、本研究に關係する資料を多く所有している。スターリング大学所蔵の資料の中には、ホッグの歌謡・民謡に関する音声資料など、きわめて貴重なものがあり、その一部は“James Hogg: Research”としてウェブ上で公開されている。しかし、その他の資料の多くは国内では入手困難であり、その一つとして、*Studies in Hogg and his World* というシリーズとしてジェームズ・ホッグ協会が設立当時から毎年出版する機関誌には、ホッグに関する重要な歴史資料やその研究成果がまとめられている。これらの資料の収集及び調査を行いながら、校訂版ホッグ全集の編集者でもある、ダグラス・S・マック氏、やギリアン・ヒューズ氏の助力を仰ぐ。

(2) ホッグが携わった文化的活動として調査対象とするのは、現代においても存続する文化的行事や事業を中心とする。例えば、ヤロー・ゲームやバーンズ・ナイトなどの行事などは、ホッグが発足と促進に関わり、形を変えて現在にも伝わり、続けられている文化行事である。これらの行事が発展し、継承されていく過程を実地調査することにより、過去にさかのぼり、ホッグの時代の農村文化の原型を発掘することが可能となる。さらにまた、ホッグによる文化的遺産が、現代においてどのように受け継がれ、スコットランド文化及びスコッティッシュ・アイデンティティーの形成に貢献しているのかを検証する。実地調査の対象地域は以下の通り。

①メルローズにあるウォルター・スコットの邸宅アボッツフォードやセルカークのウォルター・スコット卿資料館 (Sir Walter Scott's Courtroom) には、ホッグに関する資料や遺品が所蔵されている。エトリック出身の現代の国境地帯を代表する詩人・歴史家ウォルター・エリオットの著作は国境地帯の歴史・文化を知る上で重要な資料となる。エリオットはホッグの子孫であり。スコットがホッグとともに収集、編纂した『スコットランド国境地方吟遊詩人の歌』に基づき、その現代版でもある『新スコットランド国境地方吟遊詩人の歌』(2006)を出版しており、現在の国境地帯中心の農村文化を保全する活動を行っている。

② ホッグの記念碑や彼の文学活動の拠点ともなったティビー・シエルの宿 (Tibble Shiel's Inn) があるセント・メアリー湖周辺を訪れるとともに、その近郊のインターレイセン (Innerleithen) においてホッグが携わった文化的復興運動の全貌を調査する。インターレイセンはスコットの小説『セント・ロナンの泉』(1824)の舞台となったことで有名になり、急速に人気観光地の一つとして発

展した村である。ホッグは1827年にこの地においてセント・ロナンズ・ボーダーズ・クラブの発足に努め、国境地帯の伝統的なスポーツ競技の維持継承に寄与した。セント・ロナンズ・ボーダーズ・クラブによるスポーツと音楽の祭典は、現在でもスコットランドにおいて最も由緒あり伝統的なゲームの一つとして、毎年7月に行われている。また、ホッグは1815年よりエディンバラ・バーンズ・ナイトの運営に携わり、1822年にはバーンズの故郷ダンフリーズで、また、1832年にはロンドンでの開催へと発展させるとともに、1819年に行われた大規模なバーンズ・ナイトでは幹事の一人を務めている。可能であれば、ホッグとバーンズ・ナイトとの関わりについてより詳細な考察を行う。

4. 研究成果

(1) 研究初年度である2009年度は研究の基盤を作り上げることに重点を置き、ホッグによる文芸誌への投稿作品を中心に、一次資料の収集及び精読・分析作業に従事した。上半期は、1810~1811年にホッグが自ら編集した文芸誌『スパイ』、また『ブラックウッズ・マガジン』誌への投稿及び同誌の連載「アンブローズ亭夜話」における「羊飼いの像」の成立、そして代表作『許された罪人の手記と告白』に至るホッグと都市出版文化との複雑な関係性を考察し、論文として出版した。さらにスコットランド国境地帯の民間伝承を綴った『ブラックウッズ・マガジン』誌への連載『羊飼いの暦』を始めとする投稿作品の分析、『女王の宴』の読解、解釈作業を行った。下半期においては、上半期での研究成果に基づいて、まず2010年7月にドイツで開催されるジェームズ・ホッグ協会の国際学会への発表原稿をまとめた。“James Hogg's Borders”をテーマとして開かれる本学会においては、『羊飼いの暦』を中心として、ホッグの民間信仰についての記述が、デイヴィット・ヒュームに代表される啓蒙主義的歴史観及び懐疑主義的神学観といかに関わり、またそれを乗り越えようとしたのかを考察した。さらに、ホッグの晩年に出版された物語集『アルトリーブ物語』にも注目し、論文集『スコットランド文学 その流れと本質』(仮題)への掲載論文の準備として資料収集、分析作業を行った。

(2) 研究2年目となる2010年度上半期の研究実績としては、まず、7月にドイツで開催されたジェームズ・ホッグ協会の定期大会において、『羊飼いの暦』を中心としたホッグの民間信仰の記述とスコットランド啓蒙主義思想との関わりについて研究発表を行うとともに、海外のホッグ研究家との意見交換、資料収集をすることができた。また、論文集『スコット

ランド文学 その流れと本質』への掲載論文として、晩年に出版された物語集『アルトリブ物語』を中心として「エトリックの羊飼い」としてのホッグ像の変化とイギリス・ロマン主義文学・文化との関わりについて研究論文をまとめた。下半期においてはジェームズ・ホッグ協会の機関誌に投稿した日本におけるホッグ受容史についての論文を執筆する傍ら、次年度に予定している実地調査のための準備、資料収集を行った。収集された主な資料としては、ホッグが晩年に携わった文化事業として重要なセント・ロナンズ・ボーダーズ・クラブについての資料や関連論文、また、19世紀初頭のエディンバラ出版文化史に関わる資料である。これらの資料の分析作業を進めるとともに、国境地帯における中世の史実を、民間伝承をもとに歴史小説化したホッグの大作『男の三つの危険』の読解作業を行った。以上の資料分析を通じて、次年度に予定しているホッグ自身の生涯及びこれらの作品の舞台となった土地での実地調査の準備と目的の明確化がなされた。

(3) 2011年度上半期の研究実績としては、まず、18世紀から19世紀初頭に出版されたスコットランド旅行記復刻選集の編集と解説書執筆を行った。本選集はロマン主義期のスコットランド社会の変容のみならず、スコットやホッグの歴史小説の背景を知る資料として意義を持つ。また、8月末から9月初めにかけて、スコットランド国境地帯を訪れ、実地調査を行った。ホッグ研究者として著名なギリアン・ヒューズ氏の指導を仰ぎ、メルローズ、セルカーク、エトリックを中心に、ホッグとスコットの作品や伝記において重要な場所を訪ね、資料収集を行った。下半期においては、11月の関西コールリッジ研究会において、ウィリアム・ワーズワスの『逍遙』を中心に、スコットランド啓蒙主義及びエディンバラ出版文化の問題がいかに扱われているのか、スコットやホッグの詩作品・小説と比較分析しながら考察する発表を行った。当初はスコットランド国境地帯の実地調査の成果に基づき、歴史小説『男の三つの危険』の考察を行うことを計画していたが、ホッグ研究の一人者であり、校訂版全集の監修・編集者であったダグラス・S・マック氏の死去にともない、予定されていた校訂版の出版が延期されたため、期待していた成果を上げることができなかった。そのため計画を変更し、ワシントン・アーヴィングとスコットランド文壇との関わりに注目し、『ブラックウッズ・マガジン』誌を初めとするエディンバラ出版文化において醸

成された「エトリックの羊飼い」像が、いかに大西洋を越えて北アメリカの出版文化に受容されたのか、19世紀初頭の出版文化の動態とホッグの作品の近代性を明らかにすることを目的とした研究を行った。

(4) 研究最終年度に当たる2012年度は、過年度に行ったスコットランド国境地帯への実地調査を始めとする資料・文献分析の成果を踏まえ、これまでの研究成果をまとめることに費やした。当初はグラスゴーで開催されるジェームズ・ホッグ協会の定期大会に参加する予定であったが、学会の都合により延期となった。したがって、当初の予定していた、『ブラックウッズ・マガジン』誌を初めとするエディンバラ出版文化において醸成された「エトリックの羊飼い」像がいかに大西洋を越えて北アメリカの出版文化に受容されたのかという、19世紀初頭の出版文化の動態とホッグの作品の近代性を明らかにすることを目的とした研究をまとめ、2013年出版予定の論文集で発表する。

また、当初研究資料として検討していた『男の三つの危険』校訂版の出版が延期かされたため、研究期間中の分析が間に合わなかった。したがって、下半期においては方針を変更し、J.G. ロックハートの『ピーターの故郷への手紙』を中心として、ホッグとエディンバラ出版文化及びスコットランド啓蒙主義が表す近代性との関わりについて考察・研究をまとめ、関連学会の論文集で発表、及び2013年度にミュンヘンで行われる国際学会で発表する予定である。

(5) 当初予定していた研究目的のなかで、期間中に結果をまとめることのできなかつたものとして、ホッグが晩年に携わった文化事業であるセント・ロナンズ・ボーダーズ・クラブ、また歴史小説『男の三つの危険』の研究が挙げられる。いずれも資料収集及び分析においては一定の成果があげられたが、研究論文として発表するにはより精緻な検証が必要と思われ、今後の課題として残すこととした。また、ホッグが関わった文化事業の一つバーンズ・ナイトの研究については、残念ながら十分な資料収集を行う余裕が持てなかった。しかしながら2011年に行った実地調査の結果として、バーンズ・ナイトのみならず国境地帯を中心としたボーダーズ・バラッドの作者として、現代詩や現代歌謡文化においてホッグの影響が少なからず見られることがわかった。したがって、本研究のテーマをより体系的に深めていくために、バラッド作者としてのホッグの文化的業績について研究対象を広

めることが必要と判断し、今後も調査・研究を継続していくことにした。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

①金津和美、「イギリス・ロマン派農民詩人とデュープ・エコロジー」、『同志社英語英文学研究』、査読有、91巻、2013、19-35

②金津和美、「イギリス・ロマン派におけるスコットランド問題—William Wordsworthの『逍遙』を中心に」、『主流』、査読有、72巻、2012、41-57

③金津和美、“James Hogg in Japan”、*Studies in Hogg and his World*、査読無、21巻、2011、88-91

[学会発表] (計3件)

①金津和美、“The Scottish Enlightenment and British Romanticism: A Reading of J. G. Lockhart’s *Peter’s Letters to His Kinsfolk*”、Joint GER-NASSR Conference、2013年10月10日-10月13日、ドイツ、ミュンヘン

②金津和美、「イギリス・ロマン派におけるスコットランド問題—William Wordsworthの『逍遙』を中心に」、関西コーレルリッジ研究会、2011年11月26日、同志社大学

③金津和美、“Two *Shepherd’s Calendars*: Natural Supernaturalism in Hogg and Clare”、The James Hogg Society Conference、2010年7月15日、ドイツ、University of Konstanz

[図書] (計3件)

①金津和美、他、ユーリカ・プレス、『スコットランドへの旅—18-19世紀旅行記・案内書コレクション(復刻集成)』解説、2012年、3550

②金津和美、他、開文社出版、『スコットランド文学—その流れと本質』、2011、600

③金津和美、他、あるば書房、『文学都市エディンバラ—ゆかりの文学者たち』、2009、391

6. 研究組織

(1) 研究代表者

金津和美 (KANATSU KAZUMI)
同志社大学・文学部・准教授
研究者番号：90367962

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：